

## 480 鉄欠乏状態における鉄の吸収

名大医 一内 堀田知光  
 放部 斎藤 宏、亀山裕司、西野正成  
 早川紀和

鉄欠乏をきたす原因には鉄のロスの増加、吸収能の低下、偏食などがある。鉄のロスは主に出血でおきる。出血量は $^{51}\text{Cr}$ -RBCで定量する。鉄の吸収は $^{59}\text{Fe}$ を経口投与し14日後の $^{59}\text{Fe}$ 全身残留率から求める。

鉄欠乏状態には単純な鉄欠乏(IDA)と、合併症のあるIDA(IDA+c)と、臨床症状のない鉄欠乏状態(ID)などがある。これらのうち、IDAでは鉄の吸収は亢進し、IDA+cではIDAほど高い鉄吸収を示さなかった。貯蔵鉄は女性の方が男性よりも低いにもかかわらず鉄の吸収は正常男女間に有意差はなかった。IDでは鉄の吸収は正常人とIDAとの中間の値を示した。一般に鉄の吸収は大きく貯蔵鉄量に支配され、造血活動と鉄需要に影響される。

鉄の吸収の成績は各種の鉄欠乏状態の診断や経口又は静注鉄剤による治療法の選択のために重要不可欠の情報を提供する。

## 481 特発性血小板減少性紫斑病における血小板動態と障害赤血球 Clearance の測定

高橋 豊\*, 赤坂清司\*, 石原 明\*

(天理病院RIセンター\* 同, 血液病内科\*)

特発性血小板減少性紫斑病ITPは、自己免疫機序による血小板破壊の亢進がもたらす血小板減少症とみなされるが、最近、破壊する側の網内系RES機能が注目されている。我々は $^{111}\text{In}$ -oxin標識血小板動態(PIK)と、 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ または $^{51}\text{Cr}$ 標識障害赤血球の脾除去効率(ER)とを測定し、病態上の分類、治療に伴う変化、治療効果の予測等について検討した。対象はITP20例34回、非摘脾例を主に一部摘脾例も検討した。PIKは血小板数 $3 \times 10^9/\mu\text{l}$ 以上は自己、以下は型適合供血者血小板を $^{111}\text{In}$ -oxinで標識再投与し、回収率Rと平均寿命MLS(linear and exponential fitで算定)より有効寿命PIESを算出した。 $^{51}\text{Cr}$ 標識加温(H-RC)またはNEM(N-RC)処理、 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ 標識抗D血清処理(D-RC,  $50 \mu\text{g}/\text{ml}$ , RCをD<sub>1</sub>-RC,  $25 \mu\text{g}/\text{ml}$ , RCをD<sub>2</sub>-RC)で障害を加えた自己赤血球の血中Clearanceと脾における除去効率ERを既報の如く算定した。PI-ESは種々の程度に短縮し血小板数PIC減少程度と相関したが、D<sub>1</sub>-D<sub>2</sub>-RC, N-RCのERは一見無相関で、steroidでD-RC, N-RCのERの低下とともにPIESの延長、PICの上昇がもたらされ、 $\gamma$ -globulin療法でも同様の推移を示したが、あらかじめPIESの短縮がD-N-RCERの低下を伴う例は無効であった。免疫複合体としてFc $\gamma$ 受容体親和性の強弱・競合関係につき示唆的所見であるとともに治療効果の予測上有用と考えられた。

## 482 脾腫例におけるradioisotope標識血小板による血小板動態の検討

油井徳雄, 梅津啓孝, 平栗 誠, 松田 信,  
 内田立身, 刈米重夫(福島医大 一内)

脾腫は臨床的に種々の疾患でしばしば認められる病態であるが、血小板数は減少から増加まで様々である。かかる脾腫例においてradioisotope標識自己血小板を用いて血小板動態を検討した。対象は肝硬変症5例、いわゆるバンチ症候群2例、慢性骨髄性白血病3例およびその他の骨髄増殖性疾患3例、成人T細胞白血病1例、悪性リンパ腫1例、遺伝性球状赤血球症1例、および対照としての正常人11例であった。方法は被検者の自己血小板を $\text{Na}_2^{51}\text{CrO}_4$ ,  $^{111}\text{In}$ -oxineおよび $^{111}\text{In}$ -tropoloneのいずれかにて標識して被検者に輸注し、血小板寿命の測定とシンチカメラを用いた血小板の体内分布の観察を行った。脾腫例において血小板数の減少を認めたのは肝硬変症といわゆるバンチ症候群に限られたが、いずれの疾患においても血小板寿命はほぼ正常であった。特徴的な所見として全例で標識血小板の回収率の低下とシンチグラム上の腫大した脾への標識血小板の著明な集積が観察され、今回検索した各疾患においては脾腫の成因の違いにかかわらず、血小板系に関しては一様に脾における血小板プールが増大している所見が認められた。

483  $^{111}\text{In}$ 標識血小板動態よりみた抗凝固療法の評価

片山 晶\*, 山田 真, 伯者徳武, 大西健二,  
 小林芳夫(大阪府立病院心臓センター, 同RI室\*)

抗凝固薬ワーファリンの心腔内血栓活性(thrombogenicity)に及ぼす効果をIndium( $^{111}\text{In}$ 標識血小板を用い、血小板動態面より検討することを目的とした。

対象は左房血栓を有する弁膜症4例及び心筋症1例、左室血栓を有する心筋梗塞4例の計9例であり、ワーファリンのfull-dose群(PT:平均81%)とmild-dose群(PT:平均54%)の2群に分け検討した。また、コントロール(ワーファリン非投与群)として心腔内血栓症5例を用いた。コントロール群では約1ヶ月後の再検でも $^{111}\text{In}$ シンチ像は陽性像を呈した。ワーファリンの投与により、9例中8例で $^{111}\text{In}$ シンチ像の陰性化をみ、標識血小板の血栓集積度(T/B)も平均0.67より平均0.14へと有意に低下した。ワーファリンの効果は両群間で有意の差をみず、mild-doseでも充分有効であることが示唆された。本法は種々抗凝固薬の評価に有用と考えられた。